

「もとはこちら」のお話し

No.69 今月のテーマ ^{は け} 刷毛に 毛があり・・・



身に覚えのない事は
身に覚えのあること
よりも 根が深い

(平井謙次作 日めくり カレンダーより)

北原ゆり筆

子供の頃の話ですが、「世の中は、澄むと濁るの違いにて、ハケに毛があり、禿げに毛がなし」という江戸川柳を聞かされた事がありました。「なるほど!」と笑いながらも、ものすごく納得したという記憶があります。

ハケには密集して毛が生えているのに、そのケの字に点々を付けて濁らせると、事は一転してハゲとなり、毛がなくなる。澄むと濁るとでは、物事は全く正反対になる・・・以来、澄むと濁るの違いという事が、心のどこかに引っかったまま、今に到った様に思います。

しかしモノの本によりますと、心得た人は他人の頭髮については、決して話題にしないという事です。同じ悩みを持つもの同士が、互いにそっと慰め合う事はあったとしても、自身がハゲやたわしのような人は、いかなる場合であっても相手のそれを口にする事はご法度だそうです。

特に水商売に関わる人などでは、その禁句を口にした途端に、大切なお客様が二度と来なくなってしまうとの事。そしてそういう微妙なお客様の心理も理解できないようなデリカシーに欠けた人のいるお店は、近い将来必ず潰れる、いう様な話も何かで読んだような気がします。

潰れるかどうかはともかくとして、とにかく少ない頭髮の話題は避けた方が無難なようです。

汚れと浄化

さて長じて平井先生の勉強会に参加させて頂く様になって、いつも言われた事は、刷毛とハゲの話題ならぬ、澄むと濁るの違いであり、心や体の汚れとその浄化についてという事でした。

浄化をするという事は、汚れや濁りを取り払い、美しく澄んだ状態にするという事です。

ところで私共の様な年代の人は、浄化と聞くと悲しい事に真っ先に、「浄化槽」という言葉を思い付きます。

昔はこの家も便所は汲み取り式であって、水洗トイレなどというしゃれたものはありませんでした。浄化もせずにただ溜め置くだけで、その場所に不浄という名を付け、しかしそれではあんまりだということで敬語をつけて、「ご不浄」と呼んだのです。

しかしいかに敬語を付けて呼んだとしても、やはりそこは人目をはばかる場所という事で、はばかり、というような呼び名前も生まれました。お便所、お手洗い、或いは少し上品にご不浄などと呼ぶのが普通でしたが、明治の頃までは家の外に造られるのが一般的であったようです。私などは、小学生の頃は仲の良い友達同士が連れ立って、よく休憩時間に「富士山に行った」り、したものでした。

さて不浄といえば、汚れている、即ち綺麗でないという事です、考えてみれば私達の体も薄皮一枚はがせば、その下は大変な状態です。外側からは皮膚で覆われていて何も見えませんが、実はその中では一瞬の休みもなく汚物を生産し続けており、それがある程度たまれば体外に押し出されるような仕組みになっております。

普段私達は、排泄物の事を汚いだの臭いだのと言って忌み嫌っています、考えてみればそれはとてもない事かもしれません。格別に意識しなくても、肉体の中で不要となったものは外に送り出して、常に体の中を美しい状態に保っておこうという力が働いているということです。

この排泄作用が日常的に順調に行なわれているかどうかは、健康上非常に重要な要素であって、これが少しでも滞り、うまく行かなくなると、本当に大変な事になります。

そういうふうにして排出されたものは、昔は有機肥料として大切に扱われ、業者に買い取られていたり、また野菜等と物々交換されたりしていたようですが、今はお金を出して処理してもらいう時代になりました。またこれは余談ですが、道端に落ちていた犬の糞が乾燥して粉々になり、空気に混じって飛び散り、知らぬ間にそれを吸い込むお陰で、小児麻疹が予防されているというような話もあります。

汚さを嫌い、綺麗さばかりを追い求めれば、水清くして魚棲まずのことわざ通りで、両方が適度に混じっている状態というのが全て

において自然なのかもしれません。

実はいま私の住んでいる所も、町と田舎が混在しているような所です。車で5分も走れば大きなスーパーなどが立ち並んでいます、戻って来れば目の前には青々とした田んぼがどこまでも広がっています。

初夏には、緑の風が早苗を波打たせながら吹き渡って行き、秋の夕暮れ時ともなれば、黄金色に輝く稲穂の上を、幾匹もの赤とんぼがスイスイと飛びかう様子が見られます。ここに住むようになって20年以上が経ちますが、今でも田舎は本当にいいなあと心の底から感じます。

しかしその反面、そんな田舎であるために、このあたりは今も汲み取り屋さんのお世話になっています。ところでこの夏の暑さも相当なものでしたが、去年の暑さも八十年ぶりとかいわれた異常な猛暑で、実は大変な思いをさせられました。

暑さのせいで異常発酵したとしか思えない悪臭に悩まされ続けたのです。ありとあらゆる消臭剤を試してみましたが、結果は無残なものでした。その中で少だけマシだったのが、お醤油をフライパンで焦がし、そのフライパンを部屋の中で振り回し、臭いを消すというやり方でした。

しかし悪臭の元そのものは依然としてそこにあるわけですから、しばらくすればまたもとの木阿弥です。もとはといえば、悪臭の原因は自分にある訳ですが、自分では処理する術がないのです。

結局、早く救いの神、即ち汲み取り屋さんが来てくれる事を、指折り数えて待つしかありませんでした。

浄穢一如の世界の住人



話を戻し、今月のテーマ、ハケとハゲならぬ「澄むと濁る」の話ですが、私達の体も心も、美しく澄んだ状態になる事もあるれば、また濁ったり汚れたりする状態になる事もあります。

体の濁った状態とは、いわゆる病気になるったり、怪我をしたりと

いう様な状態になることです。

病氣や怪我は、浄化作用の一種です。体はそれまでに溜まった肉体や運命上の汚れや^お澱を、病氣や怪我をする事によって取り除こうとするわけです。

病氣や怪我という様な形の掃除をする事によって、それまでの間違った生活による汚れを取り除き、そしてそれまでの生活の間違いに気付かせて、体は元の綺麗な状態、即ち元氣な状態を取り戻そうとするのであって、肉体には自然の浄化作用が働いているという事です。

では肉体上の汚れではなく、心の汚れの場合はどうでしょうか。

「子供のように純粹無垢な心」という言葉がありますが、一般的に言って、「私は純粹無垢で、心のきれいな人間だ」という人と、「私はけがれ、汚れて、どうしようもない人間だ」と言う人とは、さてどちらが実際に綺麗な心の持ち主かという事です。

「我は祖師を殺し、仏を殺した大悪人である」と自分の事を「悪人」というだけではまだ足りず、「大悪人」とまで言ったのは、あの親鸞聖人です。

悪人とは、汚い人とも言い換える事ができると思いますが、親鸞聖人ほどの人が、自分の事を、大悪人だと、断言し切っているのです。

しかしこの大悪人とは、本当は大善人に通じているわけです。

本来の自分とは、仏とか人間という様なそういう相対の世界を超え、善悪を超え、善も悪もない絶対世界の住人だという事を言っているのです。

これはこの親鸞聖人が自分だけがそうなのだと云っているのではありません。元々全ての人がそういう存在であるという事をいっているのです。

誰の体も誰の心も、本来は綺麗も汚いもなく、元はいわゆる^{じょうえ}淨穢一如の世界の住人だということです。

心の浄化作用



しかし今私達は、肉体を持ってこの世に生きています。そして人間である限り、私達は誰でも似た様なものなのです。

薄皮一枚剥いて見れば、誰でも似たような状態であるように、誰が綺麗で誰が汚いという様な区別はどこにもありません。誰の体も誰の心も、本来は美しいものであり、同時に誰もが目を背けたくなるような汚いものをも、誰でもいっぱい持っているはずで

「自分が」、「自分だけが」と、他人と自分を比較区別するようになった途端に、私達は相対の世界の住人となるのです。

相対の世界とは、綺麗と汚い、病氣と元氣というような二元性の世界です。そしてこの相対世界では、たとえば身体が病氣になればそこに自然治癒力が働き、元の元氣な状態に戻そうとする力が働いている様に、私達の心に対しても、自然浄化の作用が常に働き続けているのです。

肉体が生きている限り排泄物を作り続けている事は先程も言いましたが、生きている限り私達の心にも汚物や排泄物が生じます。

汚物とは、人生上に起こってくる、いわゆる不幸事や不祥事です。そしてそれらの不幸ごとである汚物をどのように処理するかによって、私達の人生の方向は大きく変わってくるのです。自分が体験したその事をどのように受け止め、どのように解釈するかによって、私達の将来の方向は正反対になっていきます。

例えば、心から深く信頼していた人に裏切られたというような場合です。これは人生の汚物といえるかもしれません。

こういう汚物を目にした時、殆どの人は、自分を裏切った相手を憎み恨み、赦せないとして場合によっては仕返しに出たりします。

そしてやった、やり返されたという事を延々と繰り返し、怒りは収まるどころかどんどんエスカレートしていきます。

そして相手の不幸を願うような汚い心の持ち主となり、その心の汚さに応じた汚い世界の住人となって行くのです。例えていえば、それは肥え溜め度うごめいているうじ虫のようなものです。

しかし、ここで自然の摂理の存在である「もとはこちら」という

事を深く知っている人は、決してそうはなりません。ウジ虫が湧くのは、そこにウジ虫が湧くような汚い環境があるからだという事を知っているからです。常に掃除をし、美しい状態にしておけば、決してウジ虫が住み着くような事にはならないのです。ということは、自分の中に「人から裏切られる」という汚い因子なければ、どんな縁に触れても、決して人から裏切られる様な事は起きないという事です。

裏切られたという事は、裏切られるという原因が、元もとの自分の中にあつたという事です。なぜそんな原因があつたかと言えば、それはいつかは分からないけれど、昔、自分が誰かの信頼を裏切るような事をしていたからに他なりません。過去のその行為がマイナスの因子となって、自分の魂の中にずっとあつたという事です。裏切り虫という虫が住み着く状態に、自分の中がなつていたという事です。

した事をされる

命はずっと生き続けています。この肉体を持った自分は、とうに忘れてしまつていても、遠い遠い昔には人を裏切った事もあつたはずです。今回裏切られたという事が、その証拠です。裏切ったから、今度は「した事をされる」という自然の摂理に従つて裏切られたというだけの事です。

しかし今回裏切られた事によって、自分の中にあつた「人から裏切られる」という因子は、これで消えてなくなつた筈です。

そういう摂理を知つて、人を裏切つたに違いない過去の自分を深く反省し、二度と自分は人を裏切るような事はするまいと強く心に誓い、将来に向かって明るく生きるように努めれば、必ず今のドロドロした汚い世界から、抜け出す事が出来るのです。

しかしこのように、やった、やられたという様な形で過去の自分の汚れを消すよりも、形の世界に出さないで魂の浄化できる方法があります。それは、あの親鸞聖人の言葉の中にも読み取れますが、



自分は必ず悪い事をしていたはずだと潔く認めてしまう事です。そして常に相手の中に過去の自分の姿をみとめ、人を憎んだり恨んだり、また他人の不幸を望んだりしない事です。どれほど憎いと思つても、それは相手の方がこの私を浄化して下さるために、そういう悪態醜態をさらしてまでも、私に中であつた汚い因子を消して浄化して下さつたという事を知る事です。ですから心の底から相手の幸福を願うのです。

悪い事をされながら、その悪い事をした相手の本当の幸せを願うその純粋な想いによって、魂の浄化は音を立てて進むはずで

不幸な事が現れたら、これは魂の浄化作用だと思つて、過去の自分の行いを反省し、生きる方向を変えるだけでいいのです。そしてその起きてしまつた不幸事を、いつまでも思わない事です。

そして今のこの瞬間が未来の自分の運命を作っている大事な時である事を思い出し、明るく前向きな気持ちで生きる様に努めるのです。出来るだけ美しい世界に目を向け、美しい事を考え、明るく楽しい気持ちを持つ事が、そのまま自分の心の浄化につながります。

刷毛に毛があろうがなろうが、そんな事は大きな問題ではありません。問題は自分の人生の中で、自分の魂のけがれを如何にして取り除いて行くかという事だけです。

自分を汚すのも、自分を美しく浄化できるのも、自分以外にはありません。

結局は自分の人生であり、自分の人生は、自分で築き上げていくものです。

〔ご案内〕

次回の勉強会は、十月十三日(土)を予定しています。

勉強会及び月報については、どうぞ左記までお問い合わせ下さい。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com

TEL 073・461・6300